
問題

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

問題

【Nコード】

N4005E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

松山構成は日本の国防に関して強い憂いの念を抱いていた。それであちこちを動き回り何とかそれを変えようとするが。つい最近まであった軍国主義云々のお話をそっくり裏返してみた作品です。

第一章

問題

松山構成は悩んでいた。もっと詳しく言えば日本の『今』を憂いていた。

「こんな状況じゃ駄目なんだ」

「久しぶりに家に帰って最初に聞く言葉はそれか？」

暗い顔でリビングのソファに沈み込んで呟く彼に兄の英雄が言った。黒い髪を短く刈った青年だ。引き締まった逞しい長身にスポーツ選手を思わせる健康的な表情をしている。太い眉が彼をさらに男らしく見せている。

そんな兄に対して構成は髪こそ染めず派手でもないが線の細い青年だった。どちらかというと文学青年といった出で立ちだ。英雄をジークフリートとしたら彼はウェルテル、それだけの差があった。

そのウェルテルが今。ジークフリートに顔を向けて問うのだった。

「兄さんは自衛官じゃないか」

「何を今更」

表情と同じ言葉を口に出す兄だった。

「わかつていることだろう？」

「ああ、まあね」

兄のその言葉にはくくりと頷く。頷くその顔もまた細く女の子めいている。女装したら似合いそうな感じだ。

「防衛大学を卒業して陸上自衛隊に入って」

「そうだ」

弟が自分の経歴を語ることに對して肯定して頷いた。

「それで今度はPKOで海外にだったね」

「ゴラン高原にな」

それで行くことになっているのだ。

「さて、口髭でも生やすか」

「僕が言いたいのは兄さんの経歴じゃないんだ」

構成は顔を顰めさせてまた言った。

「何でこう。日本の自衛隊は」

「俺に言っても仕方ないだろう」

英雄の方も呆れた顔で弟に言葉を返した。

「俺はただの自衛官だぞ」

「幹部自衛官でも？」

昔で言うところの将校だ。それなりの地位がある。筈である。

「なつてやつと二尉になったばかりだ。若手なんだぞ」

「青年将校じゃないか」

「一体何時の時代だ。今はどうということのない立場だ」

そこが第二次世界大戦の頃とは違っていた。今ではただの職業の一つだ。時代がもう完全に変わっていたのだ。もっともこれは構成もわかっていることだった。

「制服組に発言権はないんだね」

「父さんにも言われただろう」

「うん」

兄の今の言葉に頷く。二人の父である潤一郎は元自衛官の陸将であつた。彼等の祖父は帝国陸軍で士官学校の教官であつた。つまり二人は代々軍人の名門の家にいるのである。今ではどうということのない家だが。

「軍人はただ与えられた仕事をするだけ」

「自衛官な。わかつてると思うが」

「わかつてるよ」

兄からの言葉の訂正を洩い顔で頷く。わかっているにもかかわらず。わかつていたのだ。

「それも全部」

「わかつていたら言う必要ないだろう？」

「大学生は言う必要がなくても言う権利があるんだよ」

兄にまた言い返す。随分強引な言い方ではある。

「兵器は高いし」

「気にするな」

「法整備は全然だし」

「考えるな」

「政治家も官僚も皆やる気はないし」

「他に色々やることがあるんだろう」

「全然駄目じゃないか」

あらためてこう言うのだった。彼が憂いているのは日本の国防のことだったのだ。家が代々軍人なので興味を持って調べてみたら愕然となったというわけだ。実に笑えない。

「こんなのでずっとやってきたなんて。嘘みたいだ」

「俺は何も言わないぞ」

「わかってるよ」

自衛官がそれを言っただけは駄目なので言わないことはわかっている。だからもうこれ以上言わなかった。

「全く。それで兄さん」

「今度は何だ？」

「出発何時？」

それを兄に問うた。

「船で行くの？それとも飛行機？」

「船の方が金はかからないんだ」

つまり船で行くということだ。

「海自さんの船でな。見送り頼むぞ」

「わかったよ。じゃあその時ね」

「それで父さんは？」

「まだ大学だよ」

「そうか」

父は自衛官を定年退職してから大学の教授になった。といつても軍事を語るのではなく理学博士としてだ。自衛隊時代に元々そちらの分野出身で研修や論文で博士号も取った為大学教授に請われてな

ったのだ。勿論軍事を語ることはなく彼が元自衛官であるということを知っているのは大学の中でも僅かだ。

「何でも生徒の論文を見るのに忙しいってさ」

「わかった。じゃあいい」

「母さんはカラオケ行つたよ」

母の貴美子の趣味である。時間があればそこに行くのだ。留守番はいつも構成の仕事だ。家でゲームをしたりパソコンをしたりするかこうして日本を憂いているか。どれかで時間を費やしているのである。

「そうか。平和なものだな」

「治安は悪くなったって言われるけれど平和は平和さ」

面白くなさそうな顔で兄に答える。

「兄さん達のおかげでね」

「また随分ストレートな嫌味だな」

だがそれでも表情を曇らせてはいない。慣れたような顔だった。

「だから俺に言っても何にもならないぞ」

「大学でもいつも言ってるさ」

実際に行動にも移しているのである。

「日本の国防はこれでいいのかってね。しょっちゅう街頭演説みたいにやってるよ」

「それでその反応は？」

「全然」

首を横に振って肩をすくめての言葉だった。

「誰も振り向かないし大学側も止めたりしないよ」

「表現の自由だな」

「大学側を当局とか言って批判するような話じゃないしね」

「というよりは誰も興味のない話だ」

何気に率直に核心をつく英雄の言葉だった。

「駅前とか公園でも言ってみたか？」

「お巡りさんが一人来て許可を出していないのならさっさと止めな

「さいだったよ」

「それは御前が悪い」

英雄は台所にあつたサラミを包丁で切っていた。それを皿に乗せてついでにビールを持って来た。そのサラミとビールを数缶構成の前のテーブルの上に置いた。それから彼の向かい側に座って声をかけるのだった。

第二章

「どうだ」

「有り難う」

兄からのそのサラミとビールを受け取る。それ等を飲み食いしながらまた話を続けるのだった。

「許可は出してはいないけれど。誰も何も反応しないんだ」

「大学と同じか」

「サイトも開設したよ」

そちらにも力を入れているのだった。

「けれどそちらもね。来るといえば」

「どんな人達だ？」

「軍事マニアばかりだよ」

また肩をすくめて首を横に振るのだった。

「掲示板置いてあるからわかるけれど。しかも見るのは兵器の性能とかばかりで」

「御前の言いたい兵器の値段や法整備はあんまりなんだよ」

「その通りだよ。本当に反応がないんだよ」

たまりかねたような言葉がまた出た。

「何もかも。本当に全然」

「それでも御前はやってるんだな」

「やってるよ。相手にされていないだけで」

言葉が自嘲気味になっているのを自分でも感じた。

「全くね」

「それでもやるならいい。俺は止めないからな」

「止めないの」

「誰の迷惑にもなっていないだろ」

極論すればそうだ。一人で言っているだけだからだ。

「じゃあいいんだよ、それでだ」

「そうなの」

「わかったら飲め」

目の前に置かれていいるビール缶を指し示して言う。

「折角出したんだからな」

「うん、それじゃあ」

「出港は三日後だ」

自分が出発する日のことだ。

「その時には頼むな」

「わかったよ。横須賀だね」

「ああ、そうだ」

そんな話をしながら兄と酒につまみを楽しむ。これは楽しめたが憂いは消えない。その三日後。両親と横須賀でのデートのついでについて来てくれた彼女神宮彩名と一緒に兄の見送りに横須賀の海上自衛隊の港に来了。彩名は背が高く黒い髪を後ろで束ねた女の子だ。構成の大学の同級生でもある。すっかりとした活発な女の子で彼の両親からも評判がいい。所謂公認の彼女というわけだ。この日彼女は青いジーンズに赤いパーカーで彼の側にいた。

「じゃあ。行つて来るよ」

「うむ」

「気をつけてね」

両親がまず英雄に声をかける。

「務めを果たして来い」

「期待しているわ」

「わかつているよ。やつて来る」

戦場に行くのではない。それはわかつている。しかしだった。それでも緊張がそこにあった。その緊張の中で家族は別れの挨拶を交わしていたのだ。

次は構成の番だった。彼は彩名と共に兄のところに来た。それで別れの挨拶をする。

「じゃあ頑張つてね」

「ああ」

弟に対しても挨拶をする。

「行つて来るよ」

「ゴラン高原は大変だろうけれどね」

「大変つて言葉はないからな」

笑つて返した言葉は自衛官としては模範解答であつた。それだけに表面的な意味合いも感じられるものである。だがこれは英雄の本音だつた。

「そういうことだ。行つて来る」

「そうなの」

「まあ安心しろ。生きて歸つて来るさ」

こつとも言つてきた。

「ええと。構成の彼女の」

「はい」

彩名が応えた。その笑顔で。

「彩名です」

「そう彩名さん、こいつを宜しくな」

にこりと笑つて彼女に告げるのだつた。

「楽しくやつてくれ。悪い奴じゃないから」

「わかりました。」

「それじゃあ。またな」

「歸つた時は楽しみにしておいてよ」

構成が笑つて兄に声をかける。

「その時はね」

「ビールか？」

「ああ、わかつたんだ」

「御前が飲むのはいつもそれだからな」

笑つての言葉だつた。

「だからな。わかるさ」

「そうか。わかつたんだ」

「焼き鳥だな」

そこに察しをやった。

「今度は。違うか？」

「わかるんだ」

「御前はいつも飲む時は肉ばかりだからな。わかるよ」

笑ってまた言うのだった。ここでは緊張がなかった。

「それじゃあ。焼き鳥を二人でな」

「うん、二人で」

最後にこう言葉を交えさせ船に乗り込む。家族や自衛隊に好意的な人々や軍事マニアの送りの声と市民団体の批判の声に送られて船は出港する。とりあえずはこれで話は終わりだった。

「行つたわね、お兄さん」

「ああ」

出港し海に出て行く船を見ながら彩名の言葉に頷く。

「まあ自衛隊が行く場所は安全な場所ばかりだから大丈夫だとは思
うけれど」

「そうなの」

「自衛官が死ぬのは政府も嫌なんだ」

これには確かに人道的な意味もある。しかしだ。

「死んだらそこで叩かれるからね」

「マスコミとか市民団体にね」

「あと野党から。だからあえて安全な場所に送ってるんだよ」

「政治的ね」

「そうだよ、政治的だよ」

船は次第に消えていくがそれを見ながらの言葉だった。

「軍隊、いや自衛隊ってそうなんだよ」

「そうなの」

「そうだよ。PKO自体が政治的な理由で決まったし」

話はそこに向かった。

「本音としては誰も送りたくないし行きたくないんだよ。あれこれ

揉めるし人送るのに教育してからお金かけて送るんだよ。それが大変なんだよ」

「そうだったの」

「外国が色々言ったりするからね。湾岸戦争で感謝されなかったし、九十億ドル出してそれで人を送らなかつたからだ。このことがPKOを送ることの大きな始まりになった。ところがここでまた政治的な話になるのだった。

第三章

「それで送るには送るんだけど」

「若し一人でも死んだら大変だから安全な場所になのね」

「そういうこと。まあそれは別にいいよ」

彼にとってはそれはまだどうでもいいことだった。

「自衛官が死なないに越したことはないしそれで日本の評判があがるのならね」

「いいの」

「うん。その程度はわからないとね」

その程度は政治的な判断であり彼も理解できるのだった。しかしそれだけではないのだった。彼はここでふと港の中に停泊している一際大きな艦を見たのだった。

「こんごう?」

「うん」

イージス艦だった。その威容は港の中でとりわけ目立っている。

「大きいね。本当に」

「そうだろ。あれが一隻で千二百億円なんだ」

「千二百億って」

「アメリカ軍だと遥かに安いよ。三分の一位かな」

「そんなに違うの」

「うん。問題だと思うよ」

眉を顰めさせてそのこんごうを見ながら述べる。

「それだけ高いなんて」

「PKOは仕方ないとしてもなのね」

「あの連中は何もわかっていないんだよ」

今度は海の方に大勢浮かんでいる小舟を指差した。見れば色々な垂れ幕を掲げていてメガホンが放送であれこれと言っている。彼等が何者であるか彼はよくわかっていたのだ。

「平和平和って言うけれどそれだけじゃ世の中平和にならないんだ」
「そうなの」

「そうさ。PKOだってさっきも言ったけれど政治的な理由だし仕方ないところも多いけれど」

次にまたこんごうを見た。

「それでも。問題点は色々あるんだ」
「色々」

「兵器の高さも法整備も」

「いつも言っているそれね」

「それをどうにかしないと駄目なんだよ」
言葉が強いものになった。

「戦前がどうか軍国主義がどうかよりもね。まともな軍の動きができないと」

「そうなの」

「あの連中は本当に馬鹿だよ。何もわかっていないんだ」

また小舟達を見て言い捨てた。

「軍隊がね。問題外だ」

「問題はそれじゃあ」

「そこを何とかしないと」

今度は港全体を見る。至るところに自衛隊の艦艇が停泊し潜水艦まで見える。紫や青の作業服が見えるし制服も見える。完全に自衛隊の場所だった。

「けれど。それも」

その風景を見てまた顔に憂いを見せる。そんな彼に両親が声をかけてその港を後にする。構成はそれから彩名と横須賀でのデートを楽しんだ。その時は自衛隊のことは忘れて幸せな大学生のカップルになっていたのだった。

それから彼はネットや大学の中で自衛隊の兵器の問題やその法整備について訴え続けた。だがその反応は彼の期待しているものではなく実に細々としたものだった。細々というよりは無反応に近い。

たまりかねた彼は遂に防衛省や政治家、企業に足を運ぶことにした。直接訴えようというのだ。しかし。

「兵器ってそんな値段ではないのですか？」

まずは予算を担当している財務省に向かった。その防衛関係を担当しているという若い眼鏡の官僚から聞いた言葉は彼にとっては啞然とするものだった。

「だからまああれで」

「いえ、高過ぎるんですけれど」

思わずこうクレームをつけた。

「だからこうしてお話に」

「ですが。我が国の兵器はその多くが国産で」

「はい。集中的に作れば」

「安くなるんじゃないか」

驚いたことに軍事関係を全く知らないのだった。それが言葉でわかる。

「それは防衛省からお話を聞いていますが」

「無理だとしても!？」

「残念ですが」

言葉はオブラートに包まれてはいるがその意味のないものだった。それがかえって構成に事態の深刻さを伝えていた。語る方はそうは思っていないが。

「それに関してましては」

「財務省としてのお考えはそうなのです」

「その通りです」

今度は官僚とは思えないはっきりとした返事であった。

「申し訳ありませんが」

「そうですか」

「我々としても国防については考慮しているつもりです」

彼にしては本気であり誠意のある言葉だった。構成にしろそれはわかった。少なくとも目の前のこの若い官僚が真面目な人物なのは

わかった。しかしであるが。

「そのうえで充分な予算で」

「兵器に関してもですね」

「はい。財務省の見解はそうです」

「わかりました」

こうまで言われては構成としてもこれ以上聞くことはできなかった。聞いても無益だとわかるからだ。だから彼はここで話を打ち切るのだった。

「それではそれで」

「はい。また何かあれば御連絡下さい」

真摯な声で構成に述べてきた。

「お答えさせて頂きますので」

「はい。それでは」

「また」

こうして紳士的に別れの挨拶まで交えられたがそれでも構成が納得する筈がなかった。彼は今度は防衛省に向かった。そしてそこでのコメントは。

「いえ、我々としてもですね」

初老で髪の随分薄い男の人が出て来て苦い顔で彼に説明するのだった。

「それに関しましては」

「法整備もですか」

「はあ」

実に頼りない感じであった。正直話をしていて大丈夫なのかと心の中で思いさえした。

「それはこちらとしても」

「防衛省として法案を提出していますよね」

真剣な顔でその初老の官僚に問うた。

「他の省庁の様に」

「何分それは」

また否定の言葉であつた。

「これはオフレコですよ」

「はい」

一介の学生に使う言葉かと思つたが。彼はそれを守ることにした。

「マスコミが色々と騒ぎますし」

「マスコミがですか」

「これは御存知だと思われませんが」

「ええ」

法整備まで知っていてそれを問題としている構成を見ての話なのがわかる。だからといって解決するような話でもないのであるが。

第四章

「我々に関してはまだ一部のマスコミや知識人の目が厳しく」

「そうした法案を出せないと」

「そうなのです」

やはり答えはこうであつた。

「私達はおおむね事務方に徹するだけです」

「それだけですか」

「兵器に關しましてはですね」

兵器への話にも及んだ。

「企業の方にお話されては」

「法整備は」

「政治家の方々です」

二つに分かれることになった。

「我々はただ言われたことを果たすだけです」

「それだけですか」

「はい、それだけです」

オフレコにしろあまりにも寒い話であつた。恒星はある程度は覺悟していたがこの手応えのなさにも似た無力感にすっかり絶望した。だからといって諦めるつもりはなかったが。

「法整備に關しましては特にそうです」

「わかりました」

ここまで聞いて財務省の時と同じように話を打ち切つた。

「それではこれで」

「役に立てずに申し訳ありません」

「いえいえ」

穏やかに話は終わった。それでも構成は氣が晴れず。今度は企業の方に向かったがここでの対応は彼をさらに沈んだ気持ちにさせてしまふのであつた。

「採算です」

「採算!？」

「そうです」

妙齡の美しいスタッフが出て来て言う言葉はこれ以上にならない企業的な言葉であった。

「軍需産業に關しましてはですね」

「ええ」

「莫大な設備投資と研究費、そして維持費が必要です」

「その通りです」

それがわからない構成ではない。そんなことはとつくの昔に調べている。

「ですから。我がグループとしては他の分野に力を入れております」

「他の分野にですか」

「車やテレビ」

そのグループの基幹産業である。

「そういったものにです」

「そちらにですか」

「まずは率直に申し上げますか」

「はい」

そのスタッフに対して応える。

「御願います」

「では。我々としましては軍需産業は採算がとれにくい分野なので
す」

「採算が」

「再び率直に申し上げまして」

また随分とはつきり言う人だと思った。まるでそれにより反論させないかのようであった。実際構成は何も言い返せなかった。困ったことに。

「兵器のコストにしろあの額でないと採算が取れません」

「受注額が少ないからです」

「そういうことです。自衛隊は小規模な存在です」

三十万もいない。二十五万もいない。日本の人口の割合から見ても世界各国の軍の規模から見ても数では実に小さな存在なのだ。それが自衛隊の実態の一つだ。

「ですから。そこにだけの分野は」

「そうなるのですか」

「必然的に額も高くなるのです」

「集中的に作っては」

「発注が毎年になっていますので」

「ここも問題であるのだ。集中的に作らないから余計にコストもかかるのだった。そして他には。これは自衛隊にとっては問題外の話であった。」

だが構成は。それをあえて言ったのだった。

「市場は。例えば海外の」

「御冗談ですよね」

最高に冷たい言葉だった。

「我々は海外には」

「ですよ、やっぱり」

自衛隊、いや日本は海外には兵器は売らない。売るのは他のものだ。またそっちの方が遥かに金になるのが現実だったりする。銃よりもラジオやテレビを買うものだ。誰もが。

「それにそもそも高過ぎて。あまりにも」

「売れないと」

「ですから実入りがないので」

またこの言葉が出るのだった。

「我々としては採算がないとやっていけませんので」

「企業だからですね」

「その通りです。ですから政策が変わらない限り」

「それしかないと」

「おわかり頂けたでしょうか」

これ以上どうやって反論するのか、と聞きたいまでの絶望的な話の後の止めの言葉だった。

「これで」

「はい、わかりました」

構成としてもこう答えるしかなかった。

「よく。ではそういうことで」

「こちらとしましても最大限の努力はしています」

この場合はあくまで軍需産業限定という意味だ。グループ全体ではしていないのがまた話を複雑なものにさせていた。そこまでは至っていないのだ。

第五章

彼は今度は政治家のところに行った。俗に防衛族のドンと言われる人物だ。アポを取るのは難しいかと思われたが今回は上手くいったのだ。ところがこの話でも。

「ううん、それに関してはね」

「難しいですか」

「正直に言つと私も苦労しているんだよ」

老人と言つてもいい髪がすっかり銀色になつてしまった男である。彼は苦い顔で首をしきりに左右に捻りながら椅子に座つて向かい側にいる構成に対して述べていた。

「まずは兵器の値段だが」

「はい」

「これもねえ。集中的にやるとね。確かに安くなる」

「それではすぐに」

「けれどそれをやるとだ」

ここで彼が言う言葉はまた実に政治家らしいものだった。いい意味でも悪い意味でも。

「海外もそうだが国内世論がね」

「それはもうかなり弱まっていますか？」

「いやいや、弱まつてはいてもその力は強いものなんだよ」

政治家は話すのだ。

「マスコミや知識人や市民団体に大勢いるからな」

「それですか」

「彼等が騒いでね。何かと難しいんだよ」

「法整備もですね」

「結局それも同じなんだよ」

彼はそれについても語る。

「法整備を言つとその彼等が騒いでね。それで」

「できないんですか」

「彼等だけではないしね」

まだ問題はあるのだった。

「野党にもまだそうした考えの人達がいるし」

「そちらへの話の調整は？」

「全然だよ」

首を横に振つての言葉だった。

「話を聞かないからどうしようもないんだ」

「どうしようもないんですか」

「そうだよ。何を言っても聞かない」

またしても絶望的な言葉だった。構成がこれまで数多く味わっている絶望と同じものだった。それをまたしても味わうのだった。

「あれは信仰だからね」

「それについてもわかっていているつもりですが」

「正直私も本や自分のサイトでも話をしているのだがね」

「効果があまりないですか」

「ないね」

絶望的な言葉がまた出される。

「どうしようもない」

「そうですか」

「だからこの話は賛同者を増やしていくしかないのだが」
「増えますか？」

「ええと。それに関しては」

構成の方に顔を向けてまた話す。

「君が一番わかっていていると思うが」

「確かに」

ほぼ無意識のままに政治家の言葉に頷くのだった。

「全然反応がありません」

「これも重要な問題なのだがね」

その銀色の髪をたたえている顔を思い切り顰めさせている。国防

関係を扱っている政治家としてはこれはかなり深刻な話なのだ。

「反応がないからな」

「ないですか、やっぱり」

「経済や財政も確かに重要だよ」

政治家ならばそれがわかっていない筈がないことである。

「しかし国防も同じだけ重要なのだがね」

「誰も反応しないというのは」

「興味がないからだよ」

答えはこれであつた。

「誰もな。わかつたな」

「わかりました。というよりは」

「というよりは」

「わかつていました」

それが答えだつた。構成の。

「僕も」

「そうか。それでどうするんだね」

「とりあえず話は続けていきます」

自分の信念を捨てるつもりはないということだつた。

「一人でも」

「頑張ってくれ」

今までで一番有り難い言葉だつた。力になるものではないが。

「それではな。もうそろそろ行かなくては」

「お仕事ですか」

「そうだ。済まないな」

政治家は忙しい。これは既に決まっていたことでもあつた。

「ではこれでな」

「はい、これで」

話が終わった。構成は一通り話をして回つてみてもどうにもならないことに絶望しやりきれない気持ちになつていたがその彼の携帯に。思わぬ電話が入つて来た。

「えっ、兄さんが」

兄の英雄が帰国したというのだ。彼はそれを聞いて信じられなかった。

「そんな。どうして」

何かあったのかとも思い慌てて家に戻る。そこにいた彼は何と。構成は彼の姿を見て呆然とした。

「何で帰って来たんだよ」

「急に人事で決まったんだよ」

何と口髭を生やしていた。それに驚いたのだがそれだけだった。

「人事で!？」

「ああ。それも急にな」

こう弟に対して語るがその声は明るいものだった。

「決まったんだよ。大阪の地方連絡部に行くことになったんだ」

「地方連絡部っていったら」

「ああ、人材確保のな」

要するに自衛官を募集する仕事である。自衛隊は志願制なのでこの募集は非常に大きな意味を持っている。これをしないと人が集まらないのだ。

「それに行くことになったんだ」

「また急に決まったんだね、本当に」

「俺も驚いてるよ。髭も剃らないとな」

笑っての言葉だった。

「髭を生やしていると募集担当は出来ないからな」

「それはそうとさ」

「んっ、何だ？」

「兄さんはこれから自衛隊はどうあるべきだと思っているの？」

「何度も言うがそれは言えないな」

答えようとはしない英雄だった。

「それは前にも言っているな」

「うん」

「俺達が言つたらまずいんだよ」

「まずいんだね、やっぱり」

「そつだ。また俺達に変えることもできない」

表情が真剣なものになっている。その真剣な顔での言葉だった。

第六章

「それは他の人達の仕事さ」

「他の人達の」

「だから。言わないし言えないんだよ」

「またしても真剣な言葉だった。」

「権限なんて夢のまた夢だしな」

「組織とかのシステムだよな」

「それを決めるのは自衛官じゃないからな」

「それもであつた。つまり自衛官は何もできないのだ。ただ動くだけである。その時の状況の中で。これが紛れもない実情であつた。」

「わかつてくれるか」

「うん」

兄の言葉にあらためて頷くのだつた。

「それでだ。ゴランに行く前の話だけね」

「ああ、焼き鳥だったね」

「それ、行くか」

「焼き鳥でいいの？」

「何言ってるんだ、焼き鳥だからいいんだよ」

英雄は顔も声も笑っていた。

「御前焼き鳥好きだろ」

「うん」

これは事実だ。彼はとかく焼き鳥やそういったものが好きでそこにビールがあれば言うことはない。そうした男だったのだ。その中でもやはり焼き鳥だった。

「じゃあ喜んで行かせてもらうさ」

「そう。だったら」

「それで店は何処だ？」

その笑顔で弟に問う。

「今から行くか」

「今から」

「店、開いていたらだけれどな」

「開いてるよ」

壁にかけてあったカレンダーを見てから答えた。

「今日はね」

「そうか。行くぞ、それじゃあ」

「うん。じゃあ案内するよ」

また兄に答えた。

「行こうか」

「ああ、一緒にな」

軍事のことは忘れて焼き鳥を食べに向かう。それで話はとりあえずは終わったが兄が仕事で大阪に向かうと。また彼の心を不安が占めるのだった。

大学の研究会の部屋。研究会といっても部員は彼だけだ。彩名が遊びに来るがそれは部員ではない。今日は彼女がパソコンを開いている彼のところに来たのだった。

「ああ、サイトリニユールしているの」

「うん」

本とパソコン以外は何かない部屋だ。漫画もあるがそれは全部軍事関連だ。しかも自衛隊の。完全にマニアの部屋になっている。それがこの研究会だった。

「一応。調べたことも溜まったし」

「溜まったの」

「外国のことも調べたんだよ」

彼はパソコンのキーボードを打ちながら答える。

「色々だね」

「それでわかったことは？」

「他の国じゃまだ軍隊はよくわかってるみたいだ」

「そうなの」

「うん。徴兵制がある国もあるしね」

「徴兵制って」

彩名は徴兵制と聞いてその顔を微妙なものにさせた。

「確か構成君徴兵制は」

「反対だよ」

これには反対を表明しているのだった。

「意味ないし」

「そうよね。そんなことしても全然」

「そういう問題じゃないんだよ」

徴兵制やそういうことの問題ではないと言う。これは彼の考えだった。

「数の問題じゃ。それに」

「それに？」

「今は専門的な技術集団になっているしね」

「自衛隊が？」

「そうだよ。専門職の集まりなんだ」

こう述べるのだった。

「自衛隊はね。昔みたいに徴兵制で人集めたらいいってことじゃないんだ」

「そうなの」

「数があっても仕方ないんだ」

次の言葉はこうだった。よくテレビや巷で徴兵制反対といった意見があるがこれを完全に否定していた。しかもはつきりと簡潔に、であった。

第七章

「今の軍隊ではね」

「けれど自衛隊ってあまり数多くないんでしょ？」

「そうだよ」

当然のことながらこれもわかつている構成だった。

「それでもそれで充分なんだ」

「数が少なくてもなの」

「守るだけだからね。攻める必要もないし」

これが数が少なくてもいいという理由だった。理由もちゃんとあるのだ。

「だから少数精鋭でいいんだよ。問題は」

「その質を支える装備と動かす法整備ということね」

「そういうこと。それが問題なんだよ」

困った顔をしてパソコンのデータを打ちながら彩名に答える。

「装備の整いが悪いの和高いのと法整備が全然駄目なのと」

「いざって時に動けないのね」

「全然動けないよ」

はつきりと彩名に対して述べた。

「動こうにも。法律がないから」

「あつ、そうね」

構成に言われてあらためて気付いた。

「自衛隊だってお役所だからね」

「そうなんだよ。お役所なんだよ」

そこを強調する。自衛隊もまたお役所であることを。

「間違っても無法集団じゃないよ。それじゃあテロリストだよ」

「だから法律がないと」

「いざという時動けないんだよ。そのテロリストが何かした時も」

「何処かの国がミサイル撃った時も」

「一発なら誤射かも知れないじゃ話にならないの」

とあるマスコミの記事を批判する。こうした考えは完全に受け入れないのだった。それどころか頭から全否定していた。そうした考えへの批判的検証もサイトに載せている。

「それがわかっていないんだよ」

「そういうことなのね」

「何もかもね」

何もかもとまで言った。

「徴兵制だって少し考えたらわかるし」

「考えられないのね」

「それがどうかしているんだよ。それをどうかしたくて」

「サイトも開設して勉強もして訴えてるのね」

「うん」

彩名の言葉に頷く。

「それでも。反応がなくて」

「このままずっと反応がないのかしら」

「そうは思いたくないよ」

彼は言った。

「それだけはね」

「信じているの？」

「信じていたい」

返事は曖昧で微妙なものだった。

「それだけだよ。それだけ」

「わかったわ。それじゃあ」

彩名は彼の言葉を受けてさらに問うた。

「どうするの、これから」

「これから？」

「そうよ。これからどうするの？」

それを彼に問うのだった。

「今の日本のそうしたところを変えたいのよね」

「そっだよ」

その気持ちは変わらない。本気だった。

「絶対にね」

「その為に。これからもこうしたことを続けていくのね」

「いや」

だがここで。彼は言うのだった。

「もう一つ考えているんだ」

「もう一つって？」

「防衛省に入るよ」

ここでまた一つサイトのリニューアルを終えた。これは順調に進んでいる。

「防衛省なのね」

「結局。それしかないと思うんだ」

今度はマウスを動かしながらの言葉だった。動かしながら首を捻る。

「やっぱり。中から変えていくのがね」

「それなのね」

「勉強するよ」

真剣な言葉だった。それを発する顔も。どちらも真剣なものだった。

「入る為にね」

「しかも偉くなるつもりなのね」

「偉くならないと変えられないよ」

やはり真剣な顔と言葉だった。

「結局のところね。変えるのには中から変えないと」

「中から」

「そういうこと。だからやってみるよ」

「わかったわ」

彩名もその言葉を受けて微笑むのだった。受け入れる微笑みだった。

「応援させてもらっわ」

「うん。やってみるよ」

「背中任せて」

二人で笑顔になって言い合う。これからのことに不安は感じて
いる。しかしそれでもだった。その不安を心の中に収めて今は進むこ
とにしたのだ。不安に包まれていても何もならないことがわかって
いるから。だからこそ今一歩を踏み出すのだった。少しでも前へ。
それだけだった。

問題 完

2008・4・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4005e/>

問題

2010年10月8日15時04分発行